

草津宿歴史ぎやらりい vol. 3

明治天皇、狼川を渡る

明治元年(1868)の昼食休みをはじめとし、明治天皇がここ草津宿を通行・宿泊したのは計6回にのぼります。明治天皇の行幸時、道中ではどの様にして迎えられていたのか、その準備の様子的一端を絵図より見ていきたいと思えます。

この絵図は「御東幸ニ付南笠村狼川御仮橋之図」という表題がつけられており、明治元年の東幸時の東海道通行に際し、市内の狼川(南笠東)に架けられた仮の土橋の図面です。図面からは橋脚の構造が分かるほか、橋の長さ8間4尺8寸(この絵図では1間=6尺で採用されているので、約15.4m)や幅1丈8尺(約5.4m)が書き込まれています。また橋の設置に伴い、橋の端と往還筋を結ぶ新道が設けられたことも分かります。『東海道宿村大概帳』(東海道筋の村々の情報が書かれている)や『東海道分間延絵図』(東海道筋と付近の村々を描いた絵図)を見ても橋に関する記載や描写はないうえに、後者には「平常干川」と書かれていることから、この川は普段は水の流れない天井川であり特別な通行が無い限り、橋が架けられなかったことが分かります。

草津宿本陣に残る「大福帳」(休泊者の利用記録)に行幸時の下見についての記載が散見されることから、今後これらと併せて検証することで、より詳細な行幸の様子を知ることができると考えられます。

(2012年9月)



▲御東幸ニ付南笠村狼川御仮橋之図